

A 168 食生活と人格形成に関する研究 第5報 一母親の食生活に関する態度について一

郡山女子短大 ○石村由美子 林借子 遠藤順子

目的 食生活が人格形成の基盤のひとつであると考え、女子及び男子学生を対象として、1,2報では嗜好と性格特性について報告し、さらに3,4報では食事に対する態度やしつけ及び食事に対する具体的対処行動について報告した。今回は主婦を対象として、嫌いな食物に対する対処のし方や食事のしつけなどについて、親からどのようにされたか、また親として子供にはどう対処しているかを捉えようと試みた。さらにイメージ調査等により主婦としての立場の中で「食事」がどう位置づけられているかを捉えることを目的として行なった。

方法 質問紙により、本学附属幼稚園児の母親を対象として調査した。尚、有効回答数は164名であった。

結果 食事に関するしつけについては、全般的に親からしつけられたことより子供に対して厳しくしつけており、特に衛生面でのしつけが多くなっている。また母親の年齢層が高い場合、作法面でのしつけが特に厳しいようである。嫌いな食物への対処のし方は親から受けたことと、子供にしていることはほぼ同様な傾向で、無理しても食べるようにか最も多いようである。一方、食べないと無理矢理口に入れる、嫌いなものを食べないとおやつを出さないなどの毅然とした対処が親からは殆んど受けていないのに子供への対処の中に若干みられた。イメージにおいてはあたたかく、辛くせで大切なものと肯定的に受けとめていながら、若干面倒なものでもあるということ、食事を作る立場としての意識の表われと考えられる。